

万葉の歌に詠まれた「菅の根」

2023.9. 太田蓉子

万葉集に、「菅すが・すげ」(カヤツリグサ科・スゲ属の植物)を詠んだ歌が凡そ60首もあり、「稻」49首・「ススキ・尾花とも」48首・「葦あし・よし」46首(いずれもイネ科の植物)の歌よりも、数多く詠まれています。

スゲ属の植物は何百種類もあるようですが、大きく二種類に分けられます。

カサスゲ類—湿地や溜め池の畔(低層湿原帯)に生育する。高さが1mに成るものも。笠かさや蓑みのなどの生活用品に加工された。

カンスゲ類—野や山に、庭にも生える。(常緑広葉樹林帯)
生活用品に用いられることも。

歌で「山菅やますげ」と呼ばれる13例中、11例が“山に生える菅”を意味し、この類に入る。(他の2例は、「シオクグ」、「ジャンヒゲ」と見られる。)

「菅」を詠む歌々の中に、「菅の根」(原文「菅根」)を詠んだ歌が25首にも及びます。しかし、「歌」には、カサスゲか、カンスゲか、その中のどんな名前の菅の根なのかは、全く記されていません。

この草を自ら採取して観察し、菅の根の姿形をはっきりと思い浮かべながら詠んだと言うよりも、むしろ、水辺や野山のあちこちでしばしば目にする「菅と思しき草々」、及び、引き抜かれたり掘り起こされたりした「草々の根っ子」、それらを想像しての「菅の根」であったように見えます。

事実、詠まれた「菅の根」は、25例中20例が、「草の根っ子にまつわる語句」に被せて、語調を整えるべく添える修飾語(いわゆる「枕詞」)として用いられるものです。とは言え、それらの歌の内容は、殆ど総てが「人を恋う歌」と言える特徴があります。(男同士の「思慕の歌」を含める。)

そこで今回、「菅の根」と「恋の歌」との関連を考察してみました。

そのため、先ず“「菅の根」が修飾する言葉”について検討し、次いで“「人を恋う心」を詠むにふさわしい材料としてわざわざ「菅の根」を選んだ”そんな歌についてより詳しく見ることにしました。

先ず、枕詞として用いられる「菅の根」を見ます。

「古今相聞往来歌類」と称し、作者不明歌を集めた巻・十一、十二に、寄物陳思・「植物に寄す」歌があり、中に、「菅」が多く詠まれています。

その中に、『菅に寄せる恋』とでも題することができる歌が、合計10首もあります。

その歌群の中に見られる、枕詞としての「菅の根」の例です。

「菅の根の ねもころ君が 結びてし 我が紐の緒おを 解く人はあらじ」

(柿本人麻呂歌集 巻11・2473)

((あの“菅の根っ子”ではないが)ねんごろにあなたが結んで下さった私の下紐、この下紐を解く人はよもや他にはいないでしょう。)

「あしひきの 山菅の根の ねもころに やまず思はば 妹に逢あはむかも」
(奈良時代 卷 12・3053)

((あしひきの)山に生えるあの“菅の根っ子”ではないが)心の底深く思い続けていたら、あの娘に逢えるであろうか。)

「菅の根」を、「ねもころ」(原文「惻」「隱懃」「根毛己呂」)に被せて修飾語としています。「ねもころ」は、「心の底から・心を尽くして・丁重に」(「ねんごろ」の古形と言われる。)と言った意味で、語源は「根・凝る」とも言われ、「心根」にも通じる言葉です。「ねもころ」と「草の根」は、似た者同士の親密な組み合わせと見られたと思います。普段は地中であって外からは見えない「草の根」と「秘めた恋心」、また、“念入りな心根”でもある「ねもころ」、これら三者の概念には共通する心性があります。

そして、菅と根は、「すがのねの ねもころに」と、口にも耳にも語路が良いことから、また、「すが」は、「清すがし」と同音で語感が良いことから、水辺でも野山でも親しく目にする菅が選ばれたと思います。

「菅の根」は枕詞であり、むしろ「ねもころ」の方が、「恋心」を詠ませるとも見えます。しかし、「菅の根」には、菅の生える場所や地名を添えることが出来、歌から「風景」を想起させる働きがあります。

例えば、大伴家持が、越中国府において詠んだ長歌。(卷 18・4116)

(部下の一人が、任務を受けて都に上り、数カ月後に帰国した時。)

“、、奈呉なご江の菅の根(ね)もころに 思い詰め嘆かんばかりに待っていた、その貴方が、勤めを無事終えて都から戻って来た、”と、越中の風景と共に喜びを詠みます。

(「奈呉の江」は、富山湾内にあった深い入り江。「奈呉の浦」とも。射水いみず市) (或る女の恋歌では、“カキツバタ咲く佐紀の沢に生う菅の根の、”と、序詞になる菅が1例ある。(卷 12・3052 「佐紀」は、平城宮と奈良山の間の地。奈良市佐紀町、歌姫町))

(「ねもころ」に掛ける例が、巻四の「相聞」における例等、合計 15 例見られる。)

(他の 5 例は、「菅の根っ子」の様子から、「長き」2、「深く」2、「乱る」1、に掛ける。)

しかし、「恋心」を、「菅の根」+「ねもころ」等の組み合わせで詠むと、短歌においてはどうしても類似性が高くなり、「歌」としての興趣に欠けるとも感じます。にも拘らず、数多く詠われ読み継がれた訳は、その歌々が人々の“心”に触れるものであった故、つまり、

「菅の根」+「ねもころ」が、“「地味」「真面目」なる人の心の在り方”を映した「歌言葉」であった故と見えて来ます。人の品性としても、“浮き浮きと華やか”であるよりも、より好ましいと思われていたのだと推察します。

次いで、「菅の根」自身が、重要な役割を担う歌を見ます。

「あしひきの 岩根いはねこごしみ 菅の根を

引かば難かたみと 標しめのみぞ結ゆふ」(巻三・「譬喩歌」・414番)
(あしひきの)山の岩が根を張ったようにごつごつしているの、そこに生える菅の根を引き抜くことは難しいと思って、標縄を張っておくばかりです。)

「菅の根」を、“恋する女”に譬えています。また、その女性が、気軽に文や歌を贈ることなど出来ない高貴な人であることを暗示しています。(作者不明の歌で、
「高い岩の上の菅の根」を、「身分の高い女性」に譬えたと見える歌もある。巻7・1373)
また、ある役人が詠んだ「長歌」に、
「、、、岩に生ふる 菅の根採とりて しのふくさ 祓はらへてましを、、、」とあります。
(天皇警護の職務怠慢の罪で、外出を禁じられた役人達の一人が詠う。(巻6・948))
“菅の根を採ってきて、憂いをもたらす種を祓っておけばよかった”と悔むのです。
菅は、神聖な植物と見られたようで、「祝詞のりと」にも見られ、神事に用いることもあったと言われます。(「万葉神事語辞典」・『スゲ』・國學院大學デジタルミュージアム)

厳かな神祭りの場や、大自然の中に身を於いた時など神々しさを体感する場に於いて、ふと菅の姿を目にする。「菅の根」には、この時の「清々しい」感覚が、思い描かれるとも見えます。

また、
大伴家持には、恋の歌ではありませんが、「菅の根」そのものを詠んだ歌があります。
「咲く花は うつろふ時あり あしひきの 山菅の根し 長くはありけり」
(巻20・4484)

(華やかに咲く花は、やがて色あせて散ってゆく。しかし、菅の根は、目には見えないが長く続いている。)

歌は、孝謙天皇時代の終期、台頭した藤原仲麻呂が権勢をふるい、橘諸兄もろえの後継・奈良麻呂が不満を募らせて乱を企てる当時のものです。政情の乱れを憂慮するとともに、敬愛していた橘諸兄(此の年初74歳で薨ず)を忍んで詠んだ、と言われます。
(木本好信「大伴家持と平城京の政界」・奈良県立万葉文化館)

政まっごりに於いても、人に於いても、「菅の根」のように「長く地道に」が、望ましいとの思いが見られます。

(橘諸兄にも、「雪」を詠むに、「菅の根」「ねもころ」を用いる最晩年の歌があります。
「高山の 巖に生ゆる 菅の根の ねもころごろに 降り置く白雪」(巻20・4454)
隅々まで降り積った「雪」を讃える、と同時に、「菅」をも讃えている、と言えます。)

作者不明歌を集めた巻七・「譬喩歌」『草に寄す』にある歌です。

「真鳥まどり住む 雲梯うなての社もりの 菅の根を
衣きぬに書き付け 着させむ子 もがも」(巻7・1344)
(驚の棲む雲梯の神社に植えてある菅、それを採って来て、その根で着物を染めて私に着せてくれる、そんな娘がいたらいいのになあ。)(「書き付け」は、摺り染めすること。)

「菅の根」に譬えて、遠回しに「男の願望」を詠んでいると解釈されています。
とはいえ、歌の意味内容をよく見ると、“神社に植えてある菅一束を、根こそぎ採って

持ち帰ると罪になる。また、神罰も受けるでしょう”その上“沢山の菅の根をすり潰し布に擦り付けても、染めることなど出来ない”ことが分かります。実は、この男は、“命がけで、不可能と分かっていることでも、自分のためになら尽くしてくれる女”を希求しているのです。

真面目な言葉で坦々と詠い、“あの河俣神社の菅だな”と頷きながら聞いていた人たちが、「歌」の意味が分かった時、“何て呆れた男”と思わず笑ってしまう、そして、“そう「菅の根」って役立たずの厄介者でもあるね”と気付く。それこそが、作者の意図するところであった、と察します。

作者は、笑いを取りながら、「菅の根」が持つ反面を示そうとしたとも言えます。

総じて、歌に詠まれた「菅の根」とは、“「地味・真面目・清らか」な、人の心の在り方を映す”草であり言葉であった、と考えました。

また、そのことが、「菅の根」が「人を恋う心」と繋がり、「恋の歌」に数多く詠まれ、人々に享受された理由であると思います。

主な参考文献

- ・伊藤博「萬葉集・釋注」集英社
- ・井手至・毛利正守「新校注・萬葉集」和泉書院
- ・服部 保(兵庫県立大学)・小川靖彦(青山学院大学) 他
「万葉集の植生学的研究」植生学会誌 27、2010年

カサスゲ 類の一つ



スゲ属の根、茎、穂など



写真は Wikipedia より

カンスゲ 類の2例

